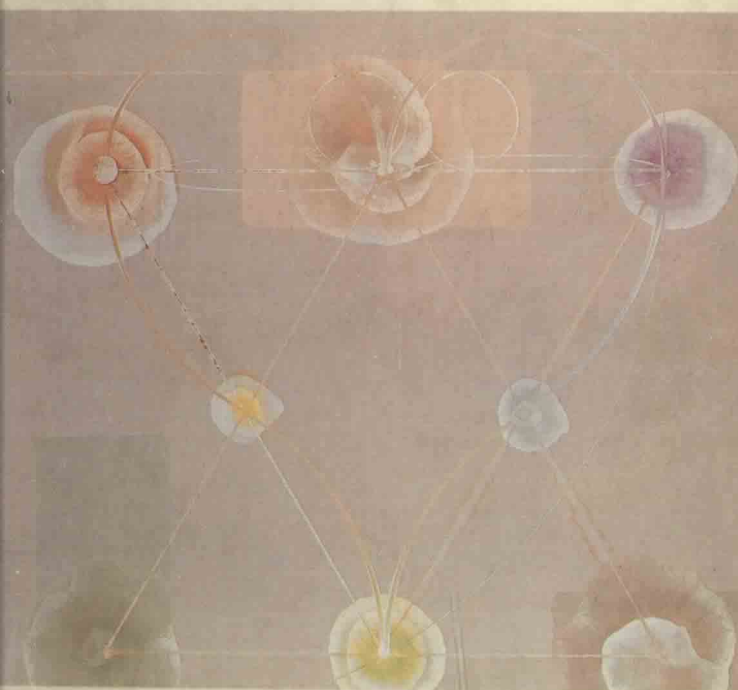


麦笛

mizuko mizuko

増田みず子



麦笛

musubi mizuko

増田みず子

福武書店



増田みず子（ますだ・みずこ）
 一九四八年、東京に生まれる。七
 三年、東京農工大学農学部植物防
 疫学科を卒業。七七年、死後の関
 係が第9回新潮新人賞候補作と
 なる。七八年、「個室の鍵」「慰霊
 が、七九年「ふたつの春」「慰霊
 祭まで」が第79、80、81回の芥川
 賞候補作になる。著書として、「ふ
 たつの春」（新潮社）『道化の季節』
 （集英社）がある。

麦 笛

一九八一年一〇月二五日 第一刷発行
 一九八二年七月一日 第四刷発行

定価 二二〇〇円

著 者 増田みず子

発行者 福武哲彦

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南四一八一八

〒三三三電話 〇三三三〇一三三

振替口座（東京）六一〇五〇九七

本文印刷 図書印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

麦

笛

——夏四月辛卯夜恒星不見夜中星隕如雨。秋大水無麥苗。（春秋）

盆地内を掃きならす勢いで何日も吹き続けた風が、今朝はすっかり止んでいた。ゆうべ眠っている間に、あの激しかった空気の渦がびたりと止まったのだらうか。さと子は、廊下の窓を次々と開け放ちながら、透明度を増したあたりの空気の穏かさが、むしろ物足りない気がして、棧に溜まった土埃を巻きあげるような、わざと手荒な開け方をしていった。

山々は丸みをおび、柔かいがくつきりと濃い稜線を空に描いて、延々と視野を切っている。

送りだしたばかりの子供のざわめきが、木立ちを抜けて伝わってきた。同じ敷地内に建つ養護学校へ、数十メートルの距離を毎日登校する彼らの足取りは軽いが、いかにも時間がかかる。いつまでも同じ場所から子供らの気配が届くので、どこにも到着しないのではないかと不安になる程である。不安が苛立たしさに変わる頃、ようやく、気配は、地面にすっと吸いこまれるように消えた。斜め上から強い光線を射こまれて、みるみる山巒が輝き始める鮮かさは、子供らの動きには、ない。もっとも彼らを教育する場所は、さと子の勤める学園ではなくて、養護学校と、そ

れに入口を向かい合せた、技能訓練を目的とする授産場であり、ここでの日常生活は、一般人の日常生活と同様、そう日に日に進歩や変化のあるわけでもないのである。

歩いて五分もかからぬそれらの施設へ、さと子自身はまだ足を踏み入れた経験はなかった。歩行困難の子をそれぞれの場所へ送ってゆくのは、大抵男の指導員であり、さと子は、学園の出入口で子供らを送り出し、迎える以外に、隣接するそれぞれの施設と関わりを持つ必要はなかった。山を眺める時は、それらの見えない西側の窓に立った。体が自然にその場所を要求した。

山の周囲にはまだ風が居残っているのか、日を浴びる場所と陰とが細かい起伏をつくり、それが絶え間なく入れかわるように見えた。水面にたつさざ波に似ていた。水の一滴一滴が光と風に背中を起こされて走る、忙しい光景が、山腹を覆う若葉の波にもあった。いくら眺めても飽きない光景というのは、あるものだ。ごく単調な、絶え間のない微細な変化の繰り返しを映されて飽きないというのも理屈に合わない気はするが、人の生活の繰り返しにはたちまち飽きるのだから、勝手なものだ。むろん飽きたからといって、中止するわけにはいかない。土混じりの濁った不快な風も、この土地では容赦なく吹く。そんな時には、今、手の届きそうな距離に浮きたつ山なみが、遠くにいざって背中を固くし、曖昧な輪郭に薄れてしまう。山が見えないとさと子は何となく退屈な気分に陥った。天候によって揺れ動く気分の方が、ずっと理屈に合わなかった。

学園の内外は、明るく、静かだった。息をすると、光がさと子の口に入りこみ、体の中で熱に

変わるようだった。さと子のいる指導員室に、西からの直線的な光線がなだれこんでくるまでには、まだ何時間もあつたが、室内は、廊下側からあふれだした朝日のために、明るすぎるほどだ。大気も時間も、そのまま満ちたりて、動く必要もなく、うっとりと呼んでゐる感じだった。

さと子は、ゆったりした力仕事をしたかった。女の体が人眼をひかないとしたら、上半身裸になつて、先月来学園付近の道路の補修を続けている人夫たちの仲間に入りたかった。額の汗を拭うついでに時々山を見あげるのには、いい気持だろう。穴を掘り、土を運び、土に汗を落とせば、大地の分身になった自分を感じとれる。自分の打ちおろした力が地面にしみこみ、汗の落ちたちっほけな面積を、いとおしむことができる。陽が翳れば山に背を向け、いよいよ力をこめて鶴嘴をふるいおろすのだ。

さと子は自分の受け持ちの「あおくさ」へ戻り、子供らが一冬着古したセーター類を漁つた。蚤棚式ベッドの足もとに造りつけた吊り戸棚に、どれもきちんとたたまれ重ねられた衣類が納めてある。山を崩した痕跡を残さぬよう、注意深く一枚ずつ抜きとった。私物を黙っていじられてペソをかきそうなのは、最年長のユタカだった。身の回りに几帳面で、人の手をわずらわすのをいやがり、人一倍素直なので、気を使う。やって貰うのがあたりまえと思つてゐる感じの、二人の女の子の方がこんな時はつきあいやすかった。

「そんなにたくさんお湯を沸かして、誰か粗相でもしたの」

炊事室のガス台を使うさと子に、割烹着姿にマスクといたいでたちのおばさんが不服そうに寄ってきた。町からバスで通ってくるパートタイムのおばさんは、若い職員に対してはどことなく居丈高な話し方をする。さと子は、お喋りをする気のないことを示すためにガスの火を覗きこんだままの姿勢で言った。

「粗相って？」

「だって、ここは清潔にしたいからさ。ここで変なもん洗われちゃ困るもの」

「沸いたらやかんと持ってゆくだけです」

「そんな大やかんを一人で持ち歩いて、転んで体に火傷でもしたら、女はおしまいだよ。あんただって、これから嫁にいくんだから」

おばさんは、女子職員に対する評価を、いい嫁になるかどうかで決める癖がある。

「沸く頃、また来るわ」

「沸く前にちゃんと来てよ。ふきこぼれて火が消えたら、ガス中毒するのはこのあたしなんだからね」

にやりと笑って炊事室を逃げ出すさと子に、おばさんは、怒っているのかはしゃいでいるのかわからない大声を投げてきた。

彼女は木工場に勤める二十六歳のやさしい息子と一緒に、駅から少し入った賑やかな場所に住んでいて、息子のために年頃の娘を狩っているという噂がある。このパートタイムも間もなくやめて、他を探すと、この頃では自分の口から言い歩いている。幸いに、さと子は息子より一つ年上なので、そろそろ焦らないと貰い手がなくなるといって、折に触れおどかされるだけで済んでいる。

湯が沸くまでにさと子は八枚のセーターを、炊事場から最も遠い戸外の足洗場に運んだ。早く戻らないとおばさんに文句を言われそうだが、地面に立って外気を味わう気分は、窓にもたれて山を眺めるよりはるかに壮快で、自分に眼だけでなく体のあることが有難いような気持ちになってくる。大盥に投げ入れた古セーターの山からは、きらきらした塵がいくつも飛びだしてきてさと子の体の周囲に漂い続けている。光の中を光が泳いでいた。山の姿は敷地を囲う樹木の梢に所々隠されているが、もともと雑木林だったというこの土地は、上手に木を残したせいかな、外からは森らしく見え、内側から見ると周囲の雑多な建築物の眼隠しの用をなしている。養護学校と授産場、それにこの学園のそれぞれの建物を独立させているのも、たつぷりと残された雑木林の名残りのおかげだった。建物は古びているが、木の方はおそらくどれも建物より古くからここにあるのに新鮮でしゃっきりと立っていた。授産場だけはさと子が学園に来たあとで建てられた平屋の鉄筋コンクリート造りなのだが、やはり古びて見えた。

建物をぐるりと回って炊事室に戻ると、やかんの火は止められており、奥の食糧倉庫で誰かとひそひそやっているらしいお婆さんの声が聞こえた。相手の声は聞こえなかったが、お婆さんの話に根気よく耳を貸してやれるのは、この卒園生で事務部の雑用を手伝っている青木ぐらいなものだった。さと子はわざと足音をたてた。職員の顔を見れば青木は急いで事務部へ戻ってゆく。こまめに用事を言いつけてくれるお婆さんが、青木は好きだったけど、青木が使われれば使われるほどお婆さんの評判は悪くなった。

「少し早めにガスを切っておいたよ。仕事してても気が気じゃなくてね」

出て来たのは、割烹着の裾に玉ねぎを包んだお婆さん一人だった。

「何に使うのか知らないけど、危っかしいから一緒に運んであげるよ。ちょっと待ってて」

玉ねぎを流しにごろっと転がしながら、たつぷりと肉のついた彼女の体が重そうに屈んだ。

「お婆さんと二人では、よけい危い」

「ねえねえ、あんた、もうすぐここをやめさせられるかもしれないって？」

彼女の厚ぼったい手がさと子の腕を軽くつかんだ。さと子は構わずやかんを持ちあげようとしたが、彼女はそのまま倉庫までさと子を引き張って行き、声をひそめた。

「あんたがあの子たちを放ったらかしにしすぎるってさ、木下さんが園長先生に告げ口してるのを聞いちゃったのよ。あんた、ここで働けるような資格、何も持ってないんだってね。何でも資

格の世の中だからねえ。決まったやり方でやって貰わないと困るっていうんだろ。近頃じゃ案外こういう所で働こうって、資格を取る若い人が増えてるんだってね。もぐりの人はもういないってわけさ」

さと子の二倍も体重のありそうな血色の良い女が、出口をふさいでいた。

「木下さんが、そう言ったの？」

「そうだよ。ま、そんなようなことをね。口で直接言わなくたって、あの人の考えてることぐらいわかるしさ。木下さんって人は、あたしにだってまあ突っ慥貪なこと。あたしも、栄養士の資格がないからって、タダ同然でこき使われてるけど、あんたもそうなんだろ？」

「資格がないのは事実だものね」

「木下さんはね、この仕事に生きがいを感じる、びちびちした若い職員を欲しいのさ。その方が使いやすいし、自然とその熱意が子供たちに伝わって、子供らも生き生きするだろうからさ。あたしに言わせれば、いくら子供が生き生きしたってここより他に行く所がないんだから、かえって残酷だと思うけど。そんなこと、あたしが言ったってしょうがないから黙ってるけどさ、あんたも今のうちに、身の振り方を考えたい方が得だとあたしは思うね。あんたのためを思うから言うんだよ。木下さんがあんたを追い出したがってるのは事実だからね。それに、どうせここにいる独身の男は足の悪い野呂さんだけだしさ。あの人はあんたを好きらしいけど、あたしは

ああいう煮えきらない男はどうも気に入らないね」

さと子は笑って軽くおばさんの肩を押し、やかんをおろした。手伝ってくれる気配はなく、一人でぶつぶつ何か言い続けながら玉ねぎの皮をむき始めた。

「おばさん、さっきも倉庫でぶつぶつ言ってたけど、独りごとは老化の始まりよ」

炊事室の出口で振り返ると、彼女は玉ねぎを投げるふりをした。

「えらそうに。自分の心配が済んでから人の心配をしておくれ。さっきは歌を歌ってたんだよ」

「おばさんも、自分のことだけ心配していれば？」

「クビになってから慌てたって遅いよ」

さと子がこたえなかったので、彼女は腹を立てているらしかった。それ以上何かを言うと思つたが、むこうを向いて勢いよく水道の蛇口を捻っただけだった。

「青木くんが来たら、事務部の人が捜してたからって、そう言って帰して」

「こっちも頼みたいことがあるから、見かけたら寄るように言つてよ」

彼女は背中で怒った声を返してきた。今度は青木に私の悪口を言うのかとさと子はおかしくなつたが、返事をせずに、腕に力をこめた。言葉の軽さと違って、十リットルの湯の重みは、体にこたえた。もっとも、おばさんぐらいの体重があれば、その体から出てくる自分の言葉を重いと感ずることが出来るのかもしれない。事実おばさんの言葉は、重いかどうかは別として、いちい

ち押し返せばこちらが息切れするに決まっているので、いずれにしろ逃げ出した方が無難だった。

水をたっぷり吸いこんだ色とりどりの毛糸の堆積は、思ったより弾力がなく、さと子の上身の体重をかけた掌を押し返してくるまでの時間が案外に長かった。数回押すだけで湯はどす黒くなったが、指にこめた力がそのまま湯の中で汚れに変わったような気もした。汗ばむ前に湯は冷えて、洗剤の泡もしぼんだ。入れかえた水は、手に痛かった。陽ざしの明るさにまんまとだまされたようで、陽に向けた背中が、手の先から冷えていった。

低い流し場を横から抱えこんでしゃがみこんださと子は、サンダルの爪先がくいこんでいる濡れた土を見た。Gパンの裾がそこに触れて、茶色い水のしみが広がっていた。陽がうしろから来るので足もととは影になっていた。

木立ちをぬけて、木下ふさえが養護学校の方へ歩いてゆく姿が見えた。正面口から出て指導員の室の側からぐりと建物を回って来たのだろう。木立ちの隙間のふさえは、さと子の眼にはいかにも突然現われたように見えたが、急いでいるふうでもなく、散歩の足取りだった。ふさえは体を揺らさずに歩く。様々な運動障害をかかえた園生たちはもちろん、園生相手に動作の大きくなりがちな職員たちの中で、主任の木下ふさえ一人、軽々と敏捷に動く。

さと子は、ふさえの歩きぶりに、遠くから見とれた。日頃から何かと判断にとまどいがちなさ

と子に対して、機敏なふさえが苛立つのはありそうなことである。言葉や表情に出さないだけに、その分、ふさえの体の中に不満が溜まっているのも事実だろう。さと子は、今さら誰にどう思われようと、自分の中に変化は生まれまいという気はしたが、面と向かってふさえに言われるのなら、やり方を変えるのは少しも構わなかった。ふさえは、自信も不安も溶けあわせた状態で小柄な体の奥にしまっている、物静かでタフな女だった。学園の誰も、彼女を嫌っていない。

さと子は、ふさえのうしろ姿を眼で見送りながら、久しぶりに時間というものに思いあたった気がしていた。子供たち相手でなく、自分一人の体のために汗を流すほどの力仕事をしたがっている自分がいた。ここに居つくようになるまでも居ついて後も、ずいぶんいろいろな思い違いを、様々な深さでしてきたが、時がたてば、思い違いはそれなりにさと子の体に取りこまれ、代謝されて体から出ていった。自分は動かないつもりでいても、体はある場所まで時間に運ばれていく。

時間は自身が変化しながら、あらゆるものを運ぶ。

さと子がここに来た当時から見れば、木下ふさえのうしろ姿も年とっていた。

学園内では、時間はあまりにゆっくり流れるので、流れていても同じに感じられる。多分、流れきらないうちに人間の寿命の方が先に跡切れるだろうと、時々さと子はふと考えることがあるが、それもおかしい話だった。大きな時間の中を小さな時間が流れる、ということ

か。小さな時間の流れが、大きな時間の流れる速度より速いか遅いかを較べてみて、何がわかるというのだろう。日常さと子の接している知恵遅れの子供らは、ゆっくり流れて短く生きる。学園を囲む樹林は、梢の高さも幹の太さも、さと子がここに来た七年前から、微塵も変化がないように見える。山は天候によってふくらんだり遠のいたりするが、多分、地球が生まれた始めからあそこにあっただろう。小さな時間を見捨てて大きな流れの一部に化してしまったものたちが、さと子を取りまいていたのだった。陽だまりに似た、時間だまりというものがあるのなら、さと子はその中にいて、変わらないものの一群の中に自分も含まれていると錯覚しても、無理はなかった。四方の視野を山でふさがれ、樹木で狭められた道を歩き、将来の希望が、生き続けることでしかない子供らと過ごしている人間が、そもそも、冴えた眼を大きく開ききって暮すなど、ありえないことかもしれない。が、さと子の生身の体は、冷たいものが頬に触れば、閉じた眼を開くしかなかった。

しぶきをあげて水道の水を受ける大盥の洗濯物を押す腕が、少しずつだるくなっていた。Gパンの前がぐっしり濡れて固く冷えているのに、額はいつの間にか汗ばんでいた。物干し竿に並べてゆくさと子の腕を伝って、大量の滴が競り合うように一列に落ち、細長い水溜まりをつくった。八枚のセータを干し終えると、さと子は自分のセーターを洗うのを忘れていたことに、今さらのように気づいた。

ふさえは、養護学校の入口を入ったきり、さと子があと片づけを終えた時にも、まだ出てこなかった。学校の理事室にいる園長と話しこんでいるのか。二人は、カップルというよりは父娘仲良くという雰囲気でもお互いの近くにいます。テキパキと仕事をするふさえが、園長にたてつく姿を、さと子はまだ見たことがなかった。園長がこれといって具体的にふさえを指図する場面にも行きあたらないのは、二十四時間同じ屋根の下で暮しているのに不思議なことだった。

園長とふさえは今理事室でさと子の処遇について相談しているのだろうか。おばさんの話ほどこまでが本当なのかいい加減なものだが、さと子は漠然と、ふさえが話をしにくる瞬間を身構えて待つ気分になっていた。さと子が、園生たちの保育者ではなく、自分が時間そのものになったような一種投げやりな気分で暮しているのは事実で、それを変えるつもりも変えられるつもりもなかったから、何か言ってくるまで待つだけだった。言われてどうするか考えるあてもなかった。

精神薄弱者更生収容施設という名称の「時間だまり」にさと子がもぐりこんでから七年がたった。ここの居心地良さは、さと子のような社会からの逃避者のために用意されたものではない、とふさえならはっきり言いかねなかった。

眼をさますために、一度東京の町を歩き、自分の本来住むべき社会を見学してくるか。さと子は、大盥と大やかを両手にぶらさげて建物に足を踏み入れながらわざとらしくそう思い、なぜ